

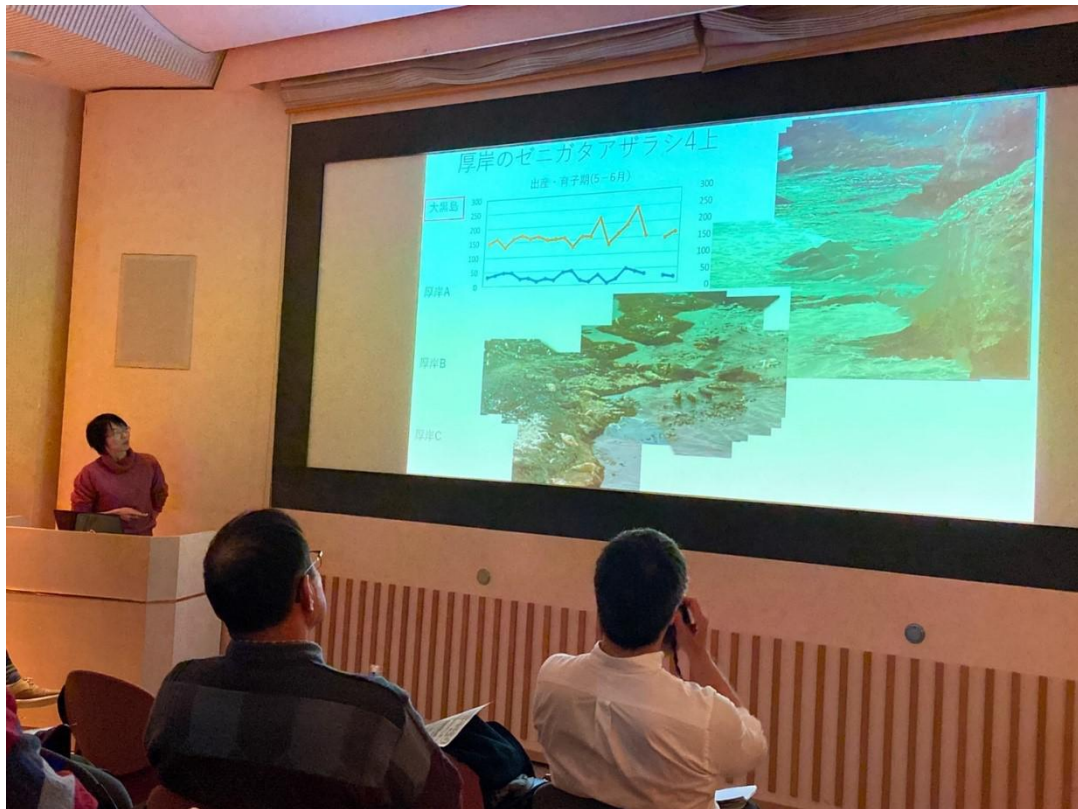
令和2年3月26日

大黒島のコシジロウミツバメ繁殖状況調査とシンポジウム開催

大黒自然研究会

大黒自然研究会は、北海道厚岸町大黒島およびその周辺海域における生物・環境を調査し、情報を蓄積・共有をすること、さらにアウトリーチ活動を通して教育・普及活動を行うことで、研究・保護活動に貢献することを目的として設立された任意団体である。今回は、厚岸町の大黒島とその周辺海域に生息する多様な生物と海洋生物が直面している環境問題について紹介し、関係者や地域住民との交流を図るために、2020年1月12日（日曜日）14-17時に、本の森厚岸情報館にて市民向け公開シンポジウム「身近な海の世界 - 厚岸の海洋生態系について考える -」を開催した。プランクトン、魚とカキ、海獣、海鳥、そして海洋プラスチック問題に関わる5名の専門家（大黒自然研究会の会員2名を含む）を招き、最新の研究結果を市民に向けて講演した。参加者約40名は、厚岸町を中心に、釧路市、鶴居村といった道東地域からの来訪が目立った。講演後、「大黒島では、（海鳥の生息を妨げる）ドブネズミの侵入はあるのか？」「いまのところは確認されておらず、大黒島で繁殖する海鳥のうち一部の種の個体数が減少している原因は他にあると思われる」、「鉄の多い場所については、アムール川からの供給があることがわかったが、では、鉄が少ない場所については、何か理由があるのだろうか」「鉄が少ない場所というのは、陸から遠い、というのが一番の理由であると考えられている。陸から遠い海域では、陸からの鉄の供給がないので植物プランクトンが少なく、鉄がなかなか増えていかない」などの質疑応答があった。

今回招いた講演者は、それぞれ厚岸町をフィールドとして活躍する研究者であり、多様な生物・環境の視点から厚岸の海洋生態系を考えてもらうために、適任の人選だったと思われる。シンポジウム後には、複数の参加者から「勉強になった」「面白かった」といった感想を多くいただき、わかりやすい内容で厚岸町の豊かな海洋生態系を紹介するという第1の目的を達成できたと思われる。また、本シンポジウムは、地域博物館、地域図書館、講演に招いた専門家、厚岸町などさまざまな団体が協力して準備を行い、開催に至った。このプロセスを経たことで、厚岸の海洋生態系の調査研究・保全にかかわる関係者間で交流が深まった。さらに当日は多くの市民参加者も加わったことで、シンポジウムを通して交流を図るという第2の目的も十分に達成されたと考えられた。本シンポジウムの内容は、1月13日の北海道新聞道東版の朝刊で紹介された。



い更南な未分め配学

海鳥の繁殖数 大黒島で激減

自然研究会シンポジウム

【厚岸】大黒島の海鳥やアザランなどの研究者団体「大黒自然研究会」（代表・西沢文吾国立極地研究所研究員）は12日、厚岸沿岸の海洋生態系について考えるシンポジウムを厚岸情報館で開いた。海鳥の繁殖地である大黒島の重要性やニシンの回遊などに関する研究成果が発表された。

北大水産科学院博士後期課程の大門純平さんは、大黒島は日本有数の海鳥繁殖地であると強調。だが、かつて8千〜1万組確認されたオセグロカモメのつがい近年約30組に激減するなど、島で繁殖する鳥がこの40年間で大きく変化したことを報告した。ウトウがひなに与える主な餌が2017年まではサケ稚魚だったが、18年から大ぶりのマイワシになったことも説明。「ウトウはその地域の魚の変動を表す指標」と、海鳥研究の意義を語った。

また、厚岸湾や厚岸湖内でのニシン回遊の研究発表もあり、資源管理のためには回遊や産卵の時期を考慮して漁獲量や漁期、保護区の設定、産卵用の人工海藻開発の必要性が提案された。アザランの生態や海洋プラスチックの危険性、道東の豊富な植物プランクトンなどに関する報告も行われた。（村岡健二）

ながら良い結果に向けた取り組みを確める。

今週のFit PRESSは… 予定

■ 釧路の麺類食べ歩きぐる麺+

皆さんから寄せられたFit PRESSへのご感想を紹介します!